5章◎日本語の書き表し方散策

「ゝ」「々」は漢字・ひらがな・カタカナ？

佐々木　勇

「ゝ」「々」は、定義によるが、普通は漢字とはしない。かといって、平仮名でもカタカナでもない。「、・ゝ・〳〵」も同様である。

これらは、「踊り字」と呼ばれ、上字の読みを繰り返すことを示す符号である。漢字と共に、中国・朝鮮半島から輸入された。

日本における踊り字の歴史は、古い。「埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘」（四七一年か）に「世ゝ」、「熊本県江田船山古墳出土太刀銘」（五世紀末）に「洋ゝ」の例が、すでに見られる。

踊り字は、上字と同一に読まれるが、清濁は、同一でない場合がある。

たとえば、万葉仮名による語表記「枳ゝ始」は、「きぎし」（上代特殊仮名遣いの甲乙を省略）を示す。その意味で、「枳蟻始」「枳蟻始」などと等しいことが指摘されている（犬飼隆『上代文字言語の研究』）。

加えて、上字と一語内で結合していることの指標ともなっている。

しかし、資料によっては、同音の繰り返しであっても、踊り字を使わず、字母の異なる仮名で表記する場合がある。さらに、その音連続が二行にわたり、前音が行末、続音が行頭となる場合も、踊り字が用いられないことが多い。つまり、踊り字は、原則として、行頭に立たない。

たとえば、藤原定家筆『更級日記』では、同一の仮名が連続する場合は、原則として、踊り字を用いる。これは、踊り字にあたる音の清濁に関わらない。そして、行頭には踊り字を用いない。

また、〳〵は、原則として、二音節以上の訓を繰り返す。それを利用して、「人〳〵」と「人ゝ」とで、それぞれ「ひとびと」と「ニンニン」とを示したであろうと考えられる文献も存する（佐々木勇・五阿弥佳子「東京国立博物館蔵『法然聖人傳繪』解説並びに影印・翻刻・索引」「鎌倉時代語研究」第十九輯、参照）。「ひとびと」は、「多くの人」であり、「ニンニン」は「ひとりひとり（各人）」の意である（『日葡辞書』参照）。

現在では、踊り字が使用されることは希で、漢字一字を繰り返す「々」が一般に使用されるに過ぎない。

日本語表記にかつて存した右のような工夫が忘れられている。

（広島大学助教授）